

# 『真草二行節用集』の版種

高 梨 信 博

## はじめに

筆者は、さきに、易林本節用集をうけた近世前期の節用集について、その系統関係の概観を報告した。<sup>(1)</sup>そこでは、四十七部非増補系とよんだ二十四種の近世節用集の関係を示すことを主眼としたのであるが、各節用集の版種に立ちいった、よりくわしい報告の必要なことも、言及したとおりである。近世前期の四十七部非増補系節用集には、時期ごとに主流となるものがあつて、その節用集が年を追うように改版されていくという傾向がみられ、それらの諸版のあいだの異同と相互関係を確認しておく必要があるのである。このような傾向を反映する近世前期の節用集とその版行時期は、おおむねつぎのようになっている。<sup>(2)</sup>

### 二鉢節用集

元和・寛永期

### 真草二行節用集

寛永・寛文期

### 頭書増補二行節用集

寛文・延宝期

### 頭書増補節用集大全<sup>(三)</sup>

貞享・元禄期

これらの節用集のうち、『二鉢節用集』については、国立国会図書館（亀田文庫）所蔵本を主たる対象とした柏原司郎氏による調査がある。<sup>(4)</sup>本稿では、『二鉢節用集』をうけて寛永期から寛文期にかけて刊行された『真草二行節用集』の諸版について、その異同と相互関係について報告する。なお、いうまでもないことであるが、この調査の目的は、うしなわれた原本を復原するといった適行的なものではない。つぎつぎとあらたな版が作成されていく過程で、近世節用集の諸版にどのような変化が生じているのかを明らかにするところに主眼があることをおこわりしておきたい。

## 諸版とその系統

『国書総目録』や山田忠雄氏による『版節用集分類目録』などを参考にしながら、これまでに調査することができた範囲で、『真草二行節用集』の諸版をあげれば、つぎのとおりである。

1、寛永十五年（1638）版（A）（B）

2、寛永十六年（1639）版

- 3、正保三年（1646）仲秋版
- 4、正保三年（1646）仲冬版
- 5、慶安三年（1650）版
- 6、慶安四年（1651）孟秋版
- 7、慶安四年（1651）孟冬版
- 8、万治元年（1658）版
- 9、万治二年（1659）版
- 10、寛文元年（1661）版
- 11、寛文四年（1664）版
- 12、寛文五年（1665）版
- 13、無刊記版
- 14、無刊記両点版

ここにあげた十四版は、字義どおり、版をことにするものである。各版のなかで初印と後印の別のあることは当然であるが、本稿では、刷りの先後の問題には立ち回らない。ただし、後印が部分的な改刻をとまなうものとして寛永十五年版があり、これはA・Bの二類として区別した。刊記のうち、〈西村又左右門梓行〉の文字をもつものがA類、この部分を削除したものがB類であるが、B類は、このほかにも本文の一部を改刻している。<sup>(5)</sup>以下、右にあげた十四版に関連して、補足事項をあげる。

『国書総目録』では、正保三年版と慶安四年版は、それぞれ一類とされているが、実際上の版のことなりとそれにもとづく刊記の違いに依じて、それぞれ二類とした。

これらのうち、慶安四年孟秋版としたものは、内題が〈真草二

鉢節用集〉とあつて『真草二行節用集』とは別であるが、内容上は、ほぼ同一の改題本とみるべきものであり、『真草二行節用集』の一本としての位置づけを考えるために、ここに加えた。この『真草二鉢節用集』について、『国書総目録』では、〈慶安四版〉と〈明暦二版〉の二種をあげている。このうち、〈明暦二版〉は、香川大学附属図書館（神原文庫）所蔵の一本とされているが、この伝本は、巻末の三葉の上半分が破損してなくなっており、刊記も刊年がしるされていたらとみられる部分がない。したがって、実際には、この伝本が何を根拠として〈明暦二版〉とされているか、不明なのである。<sup>(6)</sup>一方、〈慶安四版〉とされた伝本について、刊記を確認すると、つぎのようになっている。

#### 慶安四年孟秋吉日

書林 豊興堂新板

改めて、〈明暦二版〉とされている神原文庫蔵本の刊記の残存部分を右の〈慶安四版〉の刊記と比較すると、神原文庫蔵本の刊記は、右の刊記のうち、一行目の〈年〉字と二行目の〈豊〉字の途中以下の部分と一致していることが知られる。刊記に破損がある以上、断定はできないが、『真草二鉢節用集』には明暦二年版の存在は確認できず、神原文庫蔵本は、おそらく本稿における慶安四年孟秋版と同版であろう。

つぎに、『国書総目録』では、〈寛文二版〉として東北大学附属図書館（狩野文庫）所蔵の一本をあげている。『東北大学所蔵和漢書古典分類目録』によれば、たしかに『真草二行節用集』として寛文二年版があげられているが、これは、印度本系の節用集によ

って増補を加えて七冊本としたもので、本稿であつかう易林本節用集を直接うけついで『真草二行節用集』とは別のものである。四十七部非増補系の『真草二行節用集』で寛文二年の刊記をもつ伝本は、これまでに見いだしていない。

また、『国書総目録』では、〈寛文年間版〉として国立国会図書館（亀田文庫）所蔵の一本をあげている。これは、『亀田次郎旧蔵書目録』における〈元表紙書外題に「寛文板」の墨記あり〉という記載にもとづくものと思われるが、この伝本は、本稿の分類としては無刊記版に属する。この伝本について、特にこれを寛文年間版として別に一類を立てるべき根拠は認められない。<sup>(9)</sup>

『国書総目録』には〈刊年不明〉という一類が立てられている。本稿における無刊記版に属する諸本はその中に含まれることになるが、本稿でいう無刊記版は、その意味するところにおいて、完全に一致するわけではない。『国書総目録』の〈刊年不明〉の中には、破損や欠本などのため、本来、刊記のあるはずの部分が残されていないために〈刊年不明〉とされているものが含まれているが、本稿では、そのような伝本でも、残された部分にみられる特徴によって、前記の寛永十五年版から寛文五年版のうちのいずれであるかを判断し、所属を定めた。たとえば、『国書総目録』の〈刊年不明〉のうち、国立国会図書館（亀田文庫）所蔵の一本は、<sup>(10)</sup>下巻末の一葉が欠けているため刊記がうしなわれており、〈刊年不明〉とされているのであるが、その特色から慶安三年版と判断される。管見のうちではあるが、刊記のあるべき位置が欠けている伝本であっても、本稿にあげた十四の版種のうちのいず

れに属するのか決しえないというものは、これまでの調査では目にしていない。

本稿における十四の版種のうち、刊記に示された年紀によって版の呼称としたものでは、その刊記は、下巻末葉裏の途中で最後の付録〈廿四節并漏刻〉<sup>(11)</sup>がおわったあとに続けて、同丁の末尾近くに刻されている。これに対し、この〈廿四節并漏刻〉が下巻末葉裏の最後の行でおわるといふ伝本がある。このばあい、刊記を加えるとすれば、下巻の後表紙の見返しをもつとも可能性が高いと考えられるが、これまでに調査できた五本の範囲では、この位置にも、またその他の位置にも、刊記をもった伝本はみることができない。後表紙の見返しという位置は、改装等によつてもとの姿が改められる可能性の高い箇所ではあるが、原装をとどめていると考えてよいのではないかと思われる伝本を含めて、この位置が白紙のままであるところからすると、もともと刊記がなかったのではないかと考えられるのである。そして、このような伝本は、つぎに述べる無刊記両点版を別にすれば、すべて同版と認められる。以上のような意味で、本稿では、これらの伝本を無刊記版とよびたいと思う。現況において刊年が不明の伝本を実体と無関係にひとまとめにするのではなく、特定の一版種として立てたものということである。

この無刊記版と同じく、〈廿四節并漏刻〉が下巻末葉裏の最後の行でおわる伝本で、両点、すなわち節用集の各項目において、仮名見出しのほかに、これとことなる音訓等を漢字見出しに付記するという形式をとるものがある。この版のばあいも、刊記があ

るとすれば後表紙の見返しである可能性が高いが、さきにあげた無刊記版と同様に、刊記はみられない。この種の伝本としてこれまでに調査できたのは一本のみで、あらたな伝本の出現によって「無刊記」の文字をはずす必要が生じる可能性もあるが、現時点では無刊記両点版とよんでおかなければならない。

以上、これまでに調査できた伝本による十四版の分類について、補足を加えた。これらのほかに『真草二行節用集』の版種が存在することは予想しておかなくてはならない。一九八九年十二月発行の『木内書店古書目録』には、つぎのような項目があった。

真草二行節用集（内題）表紙替 寛文3 大1冊

これは、さきに寛文二年版なる『真草二行節用集』に言及したおりにふれた増補された方の『真草二行節用集』をさしているのかもしれないが、一冊にしたてられているという点から総紙数を推測すると、本稿の対象とする四十七部非増補系の『真草二行節用集』である可能性も否定できない。この本の現在の所在は知ることができないが、同種の伝本のあらわれることを期待させるものである。

ここで、『真草二行節用集』の十四の版種のうち、無刊記版・無刊記両点版を除く十二版（寛永十五年版をA・B二類として十三種）について、その刊記を列記しておく。なお、ここでは刊記にしろされた刊年と書肆をまとめて示すことを目的とするため、文字の大小や改行などの形式については、かならずしも原文どおりではない。刊記の形式や書体の近似が版種間の関連のどれいの違いを反映するとみられるところもあるのだが、本稿ではそれは

示すことができない。

- 1 a 寛永十五年版（A）  
寛永戊寅霜月穀旦 西村又左右衛門梓行
- 1 b 寛永十五年版（B）  
寛永戊寅霜月穀旦
- 2 寛永十六年版  
寛永己卯仲秋<sup>15</sup>吉
- 3 正保三年仲秋版  
正保丙戌仲秋上旬 書林豊興堂新梓刊
- 4 正保三年仲冬版  
正保三曆仲冬
- 5 慶安三年版  
慶安三曆孟冬<sup>16</sup>新板
- 6 慶安四年孟秋版（『真草二行節用集』）  
慶安四年孟秋吉旦 書林豊興堂新板
- 7 慶安四年孟冬版  
慶安四曆孟冬<sup>17</sup>新板
- 8 万治元年版  
万治元<sup>18</sup>戌年霜月吉旦 婦屋仁兵衛
- 9 万治二年版  
万治二<sup>19</sup>亥年 林重右衛門 開板
- 10 寛文元年版  
寛文元<sup>20</sup>辛丑年九月吉辰 烏丸通下立売下町 野田庄右衛門板行

11. 寛文四年版

寛文四甲辰年六月吉日<sup>(16)</sup> 松会衛開板

12. 寛文五年版

寛文五乙巳年五月吉日

ここにあげた十三種の刊記のうち、書肆名を含むものが七種、含まないものが六種であいなかばし、無刊記版と無刊記両点版を加えれば、書肆名を示さない版が半数をこえることになる。<sup>(17)</sup>また、書肆のうち、複数の版にわたってあらわれるのは、正保三年仲秋版と慶安四年孟秋版の豊興堂（中野小左衛門）のみで、その他は版ごとに書肆をことにする。このことは、これらの『真草二行節用集』諸版が出版される時点で、節用集の版權が特定の書肆に帰属するとは考えられていなかったことを示すものである。<sup>(18)</sup>

刊記にしるされた六書肆のうち、寛文四年版の松会衛のほかは京都の書肆であることが確認できる。この松会衛について、山岸徳平氏は、いわゆる松会版の松会と同書肆とみて、つぎのように述べている。<sup>(19)</sup>

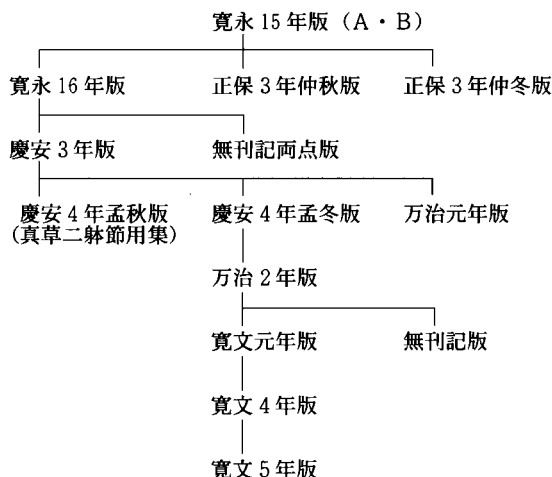
寛文四（一六六四）甲辰年六月吉日に出した、をんな仁義物語は、「松會衛開板」とある。「市郎兵衛」の「衛」だけを採取したのであろう。

この松会衛が幕府の御用書物屋であった松会と同じであるとすれば、『真草二行節用集』寛文四年版は、刊記によって確認しうるかぎり、江戸の書肆によって出版された最初の節用集となるであろう。<sup>(20)</sup>

最後に、以上の十四版の系統関係を示せば図1のようになる。<sup>(21)</sup>

図1 諸版の系統関係

諸版の異同



ここまで、版種の概要を述べ、諸版の系統関係を示したが、以下では、諸版の系統関係を定めるよりどころとなったものを含め、諸版のあいだの異同を概観し、各版の特色の一端をあきらかにしたい。諸版の異同を対照表として示し、その表に即して記述を進め、そのほかに表として示すに及ばない事項について補足を加える。

	① 紙数	② 〈節用〉紙数	③ 丁付け	④ 分巻	⑤ 四周	⑥ タテ×ヨコ	⑦ 行数	⑧ 行幅	⑨ 界
寛永15(A)	126	109丁1行	1.1~125	イ・ソ・キ	双辺	229.4×157.2	6	26.2	アリ
寛永15(B)	126	109丁1行	1.1~125	イ・ソ・キ	双辺	226.8×157.0	6	26.2	アリ
寛永16	126	109丁1行	1.1~125	イ・ソ・キ	双辺	223.6×155.0	6	25.9	アリ
正保3仲秋	126	109丁1行	1.1~125	イ・ソ・キ	双辺	219.0×155.0	6	25.9	アリ
正保3仲冬	126	109丁1行	1.1~125	イ・ソ・キ	双辺	222.2×155.5	6	25.9	アリ
慶安3	126	109丁1行	1.1~125	イ・ソ・キ	双辺	223.4×152.6	6	25.4	ナシ
慶安4孟秋	109	94丁1行	1.1~33.1~37.1~38	イ・ソ・キ	単辺	218.0×179.0	7	25.6	ナシ
慶安4孟冬	111	94丁1行	1.1~33.1~37.1~40	イ・ソ・キ	双辺	211.2×165.4	7	23.6	ナシ
万治元	127	109丁3行	1.1~48.1~53.1~55	イ・ソ・キ	単辺	218.8×160.0	6	26.7	ナシ
万治2	95	78丁4行	1.1~28.1~33.1~33	イ・ツ・ユ	単辺	217.8×164.0	7	23.4	ナシ
寛文元	95	78丁4行	1.1~28.1~33.1~33	イ・ツ・ユ	単辺	211.0×163.3	7	23.3	ナシ
寛文4	86	69丁2行	1~28.1~33.1~32	イ・ツ・ユ	単辺	235.6×166.3	7	23.8	ナシ
寛文5	86	69丁2行	1~28.1~33.1~32	イ・ツ・ユ	単辺	233.4×165.0	7	23.6	ナシ
無刊記	95	78丁4行	目録. 1~28.1~33.1~33	イ・ツ・ユ	単辺	218.4×162.6	7	23.2	ナシ
無刊記両点	126	109丁1行	1.1~125	イ・ソ・キ	双辺	219.2×165.1	6	27.5	ナシ

	⑩ 内題	⑪ 部名	⑫ナ部 〈帝位〉	⑬エ部 〈器財・言語〉	⑭ユ部 〈人名〉	⑮メ部 〈気形〉	⑯シ部 〈人名〉	⑰エ部 〈言語〉	⑱ヒ部 〈数量〉	⑲ 配列	⑳ 異形	㉑ 補訂	㉒ 増補	㉓ 削除
寛永15(A)	陰刻	陰刻	(陰刻)	器財	人名	(ナシ)	人名	(ナシ)	(ナシ)	—	—	—	—	—
寛永15(B)	陰刻	陰刻	(陰刻)	器財	人名	(ナシ)	人名	(ナシ)	(ナシ)	0	0	0	0	0
寛永16	陰刻	陰刻	(陰刻)	器財	人名	(ナシ)	人名	(ナシ)	(ナシ)	0	0	13	0	0
正保3仲秋	陰刻	陰刻	(陰刻)	器財	人名	(ナシ)	人名	(ナシ)	(ナシ)	0	1	2	0	0
正保3仲冬	陰刻	陰刻	(陰刻)	器財	人名	(ナシ)	人名	(ナシ)	(ナシ)	0	4	1	0	0
慶安3	陰刻	陰刻	(陰刻)	器財	人名	(ナシ)	人名	(ナシ)	(ナシ)	0	8	21	0	0
慶安4孟秋	陰刻	陰刻	支体	言語	人名	(ナシ)	人名	(ナシ)	(ナシ)	3	0	1	0	0
慶安4孟冬	陰刻	陰刻	(陰刻)	器財	人名	(ナシ)	人名	(ナシ)	(ナシ)	0	7	2	0	0
万治元	陰刻	陰刻	(陰刻)	器財	人倫	(ナシ)	人名	言語	(ナシ)	251	131	52	2	35
万治2	陽刻	陽刻	(陽刻)	器財・言語	人名	気形	人倫	(ナシ)	数量	260	51	90	0	11
寛文元	陽刻	陽刻	(陽刻)	器財・言語	人名	気形	人倫	(ナシ)	数量	0	0	2	0	0
寛文4	陽刻	陰刻	(陽刻)	器財・言語	人名	気形	人倫	(ナシ)	数量	112	7	4	0	2
寛文5	陽刻	陰刻	(陽刻)	器財・言語	人名	気形	人倫	(ナシ)	数量	0	0	14	0	0
無刊記	陽刻	陰刻	(陽刻)	器財・言語	人名	気形	人倫	言辭	数量	229	75	17	0	4
無刊記両点	陰刻	陰刻	(陰刻)	器財	人名	気形	人名	言語	数量	1	13	70	7	0

①④には、『真草二行節用集』の紙数・丁付け・巻のわちかたなどを示した。寛永十五年版によって『真草二行節用集』の構成を示せば、巻頭に〈部分之名〉と題した意義分類の説明があり、そのあとにイ部からス部に至る語彙集の部分、さらに付録がある。付録の内容は諸版とも共通である。

諸版の紙数の違いは、おおむね、半葉あたり六行か七行かという行取りの違いと、毎行に含まれる字数の違いとによっている。⑦にあげた諸版の行取りによって知られるように、慶安四年孟秋版以降、万治元年版と無刊記両点版のほかは、半葉あたり七行として、紙数を少なくしている。また、そのなかでも、万治二年版・寛文元年版・無刊記版は、一行あたりの字数を増して紙数を減しており、寛文四年版・寛文五年版では、⑧によって知られるように、匡郭のたての長さを広げることによって、さらに一行あたりの字数を増して紙数を削減している。

版心に刻された丁付けは、慶安三年版までの諸版と無刊記両点版では、巻頭の目録を「一」としたあと、本文全体をとおして「一」から「百二十五」までとしている。これに対し、慶安四年版以降と無刊記版では、巻ごとに丁付けを与え、また寛文四年版・寛文五年版の上巻では、目録からとおしの丁付けとなっている。以上のうち、万治元年版と寛文四年版・寛文五年版では、丁付けの合計と実際の紙数とが一致しないが、これはこれらの諸版の丁付けにとびがあるためで、万治元年版では、上・中・下の各巻とも「三十之四十」があり、寛文四年版・寛文五年版では、上巻に「十三四・十六七」、中巻に「五六・十一二・廿三四」、下巻

に「二三・八九」がある。なお、本稿では印刷上の煩をさけるため、具体的には示さないが、柱の黒口・魚尾などの形式や柱題の示しかたは、寛永十五年版から慶安三年版まで、万治二年版と寛文元年版、寛文四年版と寛文五年版がそれぞれ共通であるのは、各版とも違いがみられる。

『真草二行節用集』の伝本は三冊にしたてられたものが多く、現在、一冊本であるものも、その多くはのちの合綴であることが明らかであり、これまでに調査できた範囲では、原装一冊本と考えうるものは天理図書館（古義堂文庫）所蔵の寛文元年版のみである。④は分冊（分巻）の位置を示したもので、各冊の巻頭がイロハのうちのいずれの部で始まっているかをあげている。寛永十五年版から万治元年版までと無刊記両点版では、中巻・下巻がそれぞれソ部・キ部で始まるのに対し、万治二年版から寛文五年版までと無刊記版では、ツ部・ユ部で始まっている。この分冊の位置は、各冊の紙数をおおよそ同じくりにすることをめやすとしたうえで、部のかわりめが一葉のかわりめとはば一致する箇所を選んでいるものと考えられる。ただ、寛文四年版・寛文五年版の中巻と下巻の境界は、ユ部の途中におかれている。このため、中巻の末尾近くに、通常どおりユ部の先頭を示す「由」の表示があるほかに、下巻の巻頭に「又遊」として、ふたたび部名表示を加えている。なお、寛永十五年版から慶安四年孟冬版までの諸版と無刊記両点版では、ク部の末尾に「終」の字が刻されているが、これは『真草二行節用集』のもとになった『二鉢節用集』で、上下二巻のうちの上巻の末尾におかれていた「終」字をそのまま引

きついだものであろう。万治元年版から寛文五年版までと無刊記版では、この〈終〉の字は除かれている。かわって、万治元年版ではレ部の末尾に〈節用集上終〉とあり、寛文四年版・寛文五年版ではソ部の末尾に〈上終〉とあって、それぞれ実際にあわせて、上巻の末尾を示している。

⑤と⑥には、匡郭について、四周の单边・双边の別と、たて・よこの長さ（内のり）を示した。<sup>(23)</sup> さきに図1で示した系統関係とてらしあわせてうえで、匡郭のたての長さを比較すると、ほとんどのばあい、後出の版の方が短くなっていることが知られる。『真草二行節用集』のばあい、改版がいわゆる覆刻によっておこなわれていると考えられるものでも、必ずしも一葉全体を単位としてそのまま覆刻がなされているとは考えられないことがあり、<sup>(24)</sup> 匡郭の縮小を単純に覆刻によるものとすることはできないであろうが、そのような傾向は認めてよいであろう。寛文四年版・寛文五年版が匡郭の長さを増すことによつて一行あたりの字数をふやしていることは、前述のとおりである。

匡郭の横の長さは、半葉ごとの行数の違いとも関連する。さきにもふれたように、諸版の行取りは⑦に示したとおりであるが、⑥と⑦によつて一行あたりの平均の幅を求めると、⑧のようになる。これによれば、六行本を七行本に改めるさいに、六行本における一行の幅を保ったままで七行本としたのは慶安四年孟秋版のみで、その他の諸版では一行の幅をせまくして、版面のよこの長さが大きくなりすぎることを避けている。無刊記両点版の一行あたりの幅が大きいのは、両点本として楷書体に音訓等を添えたた

めである。

⑨に〈罫〉としてあげたのは、毎半葉六行あるいは七行の行をわかつ罫線ではなく、各行において、真草二行の中心となる行書体とその左に並記される楷書体とのあいだの罫線の有無である。正保三年仲冬版までの諸版には、この罫線があるが、慶安三年版以後の諸版では除かれている。

⑩と⑪には、内題とイロハ以下の各部を表示する文字が陽刻で示されているか、陰刻で示されているかの別を示した。内題は、寛永十五年版から万治元年版までの諸版と無刊記両点版では陰刻で、その他の諸版では陽刻である。部名は万葉仮名によつて示され、万治二年版と寛文元年版が陽刻で、その他の諸版は陰刻である。ただし、部名を原則として陰刻で示す諸版でも、陽刻の部名表示がまじることがある。また、部名の表示に用いられている万葉仮名は、諸版とも共通であるが、慶安四年孟秋版と無刊記版において、他の版とはことなる字母を用いたところがある。なお、巻頭のイ部の部名表示は、寛永十五年版以下の諸版とも、本文一丁表一行目の内題の上に置いているが、万治二年版・寛文元年版・無刊記版のみは、一行目の内題のあと、二行目の行頭に置いている。

⑫から⑭までには、各部内の意味分類を示す門名の表示にかかわる異同から例をあげた。

⑬は、ナ部人倫門の項目〈南面<sup>なんめん</sup>〉に付された註文〈位帝<sup>ゐてい</sup>〉がどのようなになっているかを示したものである。この〈位帝〉は、易林本節用集において、すでに門名と誤解され、陰刻で示されていたも





c 万治二年版、寛文元年版  
d 寛文四年版、寛文五年版

e 無刊記版

②には、親子関係の版種間の対応する項目の仮名見出しにおいて、語形のことなるものの数をあげた。単純な誤りと考えられるものや、活用形のことなりなどは含めず、仮名づかいや濁点の有無の違いなども除いたうえ、〈懸隔〉と〈懸隔〉と〈反古〉と〈反古〉と〈潰〉と〈潰〉などのように、実質的な語形上のことなりと認めうる相違箇所に限った。このような語形のゆれは近世前期の節用集に広くみられるところであり、さきに草書本節用集について若干の例を指摘したが、同じ『真草二行節用集』のなかの版種間においても、同様の語形のことなりをみることができるのである。

②には、やはり親子関係の版種間の対応する項目において、先行の版にみられる誤りを補訂したと考えられる箇所の数をあげた。仮名見出しの誤りのほか、仮名見出しに対応する漢字表記の誤りを補訂したものなども含んでいる。⑬・⑭とあわせてみると、対応する項目間の語形のことなりや誤りの補訂と、項目の配列の変更とが、万治元年版や万治二年版では、ほぼ対応していると認められる。一方、寛文四年版のように、配列変更は多いが、語形のことなりや補訂は少ないもの、無刊記版のように、配列変更が多く、語形のことなりも多いが、補訂は多くないもの、無刊記両点版のように、配列変更も語形のことなりも少ないが、補訂の多いものなど、版によって違いがある。なお、数量として示しにくい

ため表にはあげなかったが、改版にあたってあらたに生じた誤りの数は、寛文四年版がきわだつて多く、つぎに正保三年仲冬版・慶安四年孟冬版が多い。このようなばあい、たとえば寛文四年版をうけた寛文五年版は、誤りを訂正するという姿勢を強くもたなければ、寛文四年版の誤りをそのまま引きつぐことになる。

②と②には、版種によって増補または削除されている項目の数をあげた。少数ではあるが、版によって項目の増補や削除があることは注意すべきである。項目削除は、万治元年版や万治二年版など、あらたな配列変更の多い版にみられる。無刊記両点版に七項の項目増補がみられるのは、②であげた同版の内容補訂の姿勢に通じるものであろう。

#### おわりに

『真草二行節用集』の諸版は図1に示したような系統関係を示すが、実質的な内容の面からみると、さきに項目の配列順の違いによって分類した五つのグループがほぼそのまま内容上の異同にも対応していると考えられる。ただ、無刊記両点版のみは、項目の配列順からは寛永十五年版のグループに属するが、先行版の誤りなどを補訂するという姿勢が顕著である点において、別に一類とすべきであろう。時代としては、慶安までの諸版では、行取りや丁付けの面での変化はあっても実質的な内容において変化がとばしいのに対し、万治以降の版種のなかには、実質的な相違を含むものがあらわれるといえよう。

本稿では、版種の確認と各版の異同の概要を述べることを主と

し、あらたな版が作成されていく過程にかかわる具体的な諸問題や、そこからみちびかれる各版の性格についてのくわしい検討には及ばなかった。

注(1) 拙稿『近世前期の節用集——四十七部非増補系諸本の系統関係』

『辻村敏樹教授 日本語史の諸問題』(明治書院、一九九二)。

(2) 注(1) 文献、三八三ページ参照。

(3) 注(1) 文献、三七六ページ参照。

(4) 柏原司郎『旧亀田文庫蔵『二体節用集(横本)』の版種について』『語学文学』11(一九七三・三)。

(5) たとえば『綴』とあるべき項目(八丁裏二行目)の仮名見出しの三字目の位置が寛永十五年版(A)ではほりのこしのまま黒いかったままりとして印刷されているが、寛永十五年版(B)では削除されている。

(6) 『神原文庫分類目録』(風間書房、一九六四)には『明暦二刊(京都豊興堂)』とあり、『国書総目録』の記事もこれを引きつぐのであろう。筆者が調査したのは一九八二年のことで、そのときにはすでに刊記の一部が破損していたが、目録作成の時点では刊年を確認できたということも考えられる。

(7) 函架番号〈四・二七八二二〉。

(8) 函架番号〈813. S6216. 1666〉。

(9) 旧蔵者がこの伝本を『寛文版』としたのは、版そのものの分類としてではなく、印行の時期として推定したものであったかもしれない。

(10) 函架番号〈813. S6216. 1650-2〉。なおこの例のばあい、亀田文庫蔵本に対する函架番号の与えかたでは、末尾の1650がその伝本の刊年、または刊年と推定される西暦年をあらわす。本書が1650、すなわち慶安三年を函架番号とするのは、刊記を欠くという点では

刊年不明とされているが、慶安三年版と同版であるということを目録作製にあたった方が承知しておられたことを示すものである。

(11) ただし万治元年版・寛文四年版・寛文五年版は、下巻末葉表の途中で付録がおり、そのあとに刊記がある。

(12) 成城大学図書館所蔵で、函架番号は〈813.3.3.22〉。なお、松村明編『国語史概説』(秀英出版、一九七二)一九〇ページに写真があげられている『真草二行節用集』は両点本である。いずれの所蔵かわからず、成城大学図書館蔵本と同版かいないかの確認もできない。

(13) 両点という近世節用集を特徴づける要素の一つがいつから始まったのかを知るうえでも、この無刊記両点版の実際の出版時期を明らかにすることは重要である。なお、刊年の明記されたものとしては、管見のうちでは『頭書増補二行節用集』の延宝七年版がもっとも早い時期の両点本節用集である。

(14) ちなみに、寛文二年版の『真草二行節用集』の原装は七冊と考えられ、総紙数は二四一丁である。

(15) 国立国会図書館(亀田文庫)蔵本では、『吉』字までで、このあと、『日』や『旦』などの文字はない。

(16) 後述の山岸徳平氏や弥吉光長氏のように従って『日』字とする。寛文五年版の刊記の『五月吉日』の『日』字も同じ書体である。

(17) 刊記に刊年のみをしるし書肆名をあげない伝本については、今後の調査によって書肆名をともし初印本が出現する可能性を考慮する必要がある。

(18) 近世節用集に関して重版・類版が問題となったものとも古い例は、京都書林仲間の『済帳標目』に示るされた、『字尽重宝記綱目』(元禄六年刊)と『合類節用集』(延宝八年刊)の関係であろう。なお、宗政五十緒『近世京都出版文化の研究』(同朋舎出版、一九八二)三三三ページ参照。

- (19) 『書誌学序説』(岩波書店、一九七七)二五七ページ。なお、松会版については、弥吉光長氏に、〈松会版の探求——江戸初期出版人の半面〉(『ビブリア』75、一九八〇・一〇)、『弥吉光長著作集』第三巻所収)がある。

(20) このうち、延宝から貞享にかけて、江戸の書肆による近世節用集の出版が増加する。

(21) 本稿では、この系統関係の設定に至る一々の根拠について例示することは省略する。また、後出の版において、直接に依拠したもののはかに、参照の可能性のある版が考えられることもあるが、本稿ではそれにはふれない。なお、この系統図のうち、無刊記版と無刊記両点版の位置は系統上の関係を示すにとどまり、刊行の実際の時期にはかわらないことをおことわりしておく。

(22) 函架番号〈六九・一七〉。〈新二鉢節用集〉と書名を刻した題箋の下部に、〈上・中・下〉の巻名が横に並べられており、合綴のあとと認められず、原装一冊本と考えられる。

(23) 巨郭の大きさは、各版について、巻頭の本文第一丁から第五丁までを計測し、その平均を示した。なお、ここにあげた数値は、正保三年仲秋版は都立中央図書館(加賀文庫)蔵本、無刊記両点版は成城大学図書館蔵本により、その他はすべて国立国会図書館蔵

## 新刊紹介

篠崎圭介・高野公彦・坪内稔典  
復本一郎・村上護

『俳句のふるさと・松山発  
激論 俳句はどうなる』

『俳句の現在・過去・未来』

愛媛はいわゆる「子規山脈」と呼ばれる人々

本によった。同版であっても、伝本によって二、三ミリ程度の違いがあることがある。

(24) 改版のさいの版下作成がどのようにおこなわれたのかは、版種間のことなりを具体的に示したうえで論じたいと考えている。

(25) ちなみに、〈体〉を門名としてあげたあとにくる欄目は、〈爾女〉の三項である。同じ行の上部にすでに人倫門の表示があり、〈倫〉とはできなかったであろう。

(26) ⑨以下にあげた数値は、基準のとりかたなどによって変動しうる。本稿ではそれぞれの内容を具体的に示す余裕はないので、各版の性格の違いを知るための概数とお考えいただきたい。

(27) 慶安四年孟秋版の上巻二行目・四行目は、本来、同丁裏七行目のあとに位置すべきものであり、同様に上巻二十二丁裏一行目・二行目は同丁裏七行目のあと、下巻十四丁表一行目・三行目は同丁表七行目のあとに位置すべきものである。また、無刊記両点版の八十二丁裏一行目・二行目は、寛永十六年版では二行目・一行目の順であったものを逆転させている。慶安四年孟秋版の例は誤りであるが、無刊記両点版の例は意図的なものである。

(28) 拙稿〈草書本節用集について〉『国文学研究』83(一九八四・六)。

を輩出し、近代俳句の濫觴とされる。その松山において、一九九五年の春、俳句誕生百年を記念し、『激論 俳句はどうなる』と題した討論会が行われた。

討論は三部構成で▽第一部「俳句の現在」「俳句が抱える光と影」ブームの底流を探る▽第二部「俳句の過去」「俳句とは何だったか」「俳句のルーツを探る」▽第三部「俳句の未来」「俳句はどこへ向かう」残る句・名句を探る」の

テーマを掲げる。出席者は、いずれも愛媛の出身者で、現在、全国に活躍する俳人、歌人、俳文学者、作家らである。専門分野を異にするそれぞれの立場から六時間にわたって忌憚ない意見が交わされた。特に実作者と非実作者の俳句観の相違点を徹底的に討論し、俳句の本質と未来に迫る。

(平7・8 愛媛新聞社 B6判 三五六頁 二  
三〇〇円) (寺島 徹)